

4、川崎市庁舎改築への道

川崎市が市制施行してから9年後の昭和8年(1933)12月に財政調査委員が他都市を視察、市庁舎の新築事業予算が起債可能であることを確信し、翌年2月26日には実施予算案を市会に提出、3月20日には可決されます。

しかしこの事業には、反対意見も出されていました。

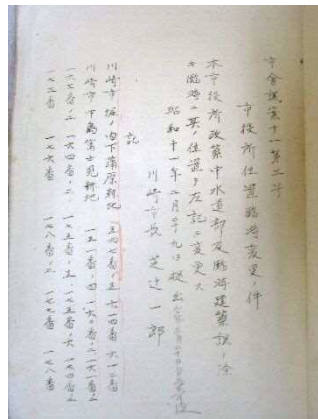
旧川崎小の古材再利用で応急建築した庁舎であったため再建築案は度々出されていましたが、財源調達の見通しが立たず遅れていました。

さらに将来の需要を見越した鉄筋の本格的な建物にしたいという意見が多数であり、計画予算は増えるばかりでした。

「昭和九年 市会会議録」(市史編さん資料1)では、市庁舎総工費が高額すぎることで、大東京・大横浜にはさまれ、かつ横浜との合併を当時考えていた人達もいたことから、厳しい状況下で新築に踏み切ったとみられます。

昭和11年(1936)4月より庁舎内組織が仮庁舎に移転を開始し、同7月に工事が開始されました。

「昭和11年 文書々類」(S11-永02)では、中水道部・臨時建築課以外は堀の内下蒲原耕地や中島富士見へ移動することに伴い、市役所の位置臨時変更について昭和11年(1936)3月20日の議会で可決されています。



昭和11年 文書々類 (S11-永02)

5、市庁舎完成とその後

表紙にも掲載した「昭和11年 市庁舎新営工事設計内訳書」「昭和11年 川崎市庁舎新営工事第一回内払請求書」には、仮設工事から防水防湿工事、鉄骨費、タイル及び煉瓦工事費と各工事過程にかかった費用が記されています。

そしてついに昭和13年(1938)2月10日、1年7ヶ月の日数をへて、3階建一部2階建(時計塔は約8階建)、総工費57万円をかけて、川崎市砂子1丁目(現・宮本町1番地)に堂々と竣工されました。



新市庁舎の図面 『川崎市廳舎』より

また、当時出された記念誌には完成当時の庁舎図面や館内写真が掲載されています。

太平洋戦争末期には、空襲の被害から建物を守ろうと外壁を迷彩柄に施していました。

戦後になると川崎は工業都市として復興を遂げ、昭和47年(1972)には政令指定都市となりました。

その間にも市の事業拡大ともなあって、市庁舎は改築を繰り返かえし、現在の形となっています。



昭和13年 本館3・東館2階建



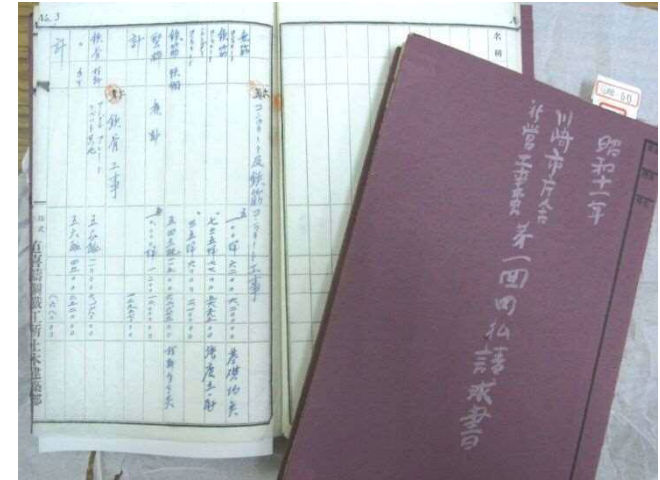
昭和34年 本館が4階建に改築



昭和25年 東館が3階建に増築

あなたに伝えたい記録と記憶 —公文書館所蔵資料から—

第1回：知られざる本庁舎の歴史



左：昭和11年 市庁舎新営工事設計内訳書 (S11-永07)
右：昭和11年 川崎市庁舎新営工事第一回内払請求書 (S11-永08)

川崎市役所本庁舎は、昭和13年(1938)に建てられ、増築・改築を加えながら現在に至りますが、このたび耐震性の不足などから、建て替えられることとなりました。

そこで本展示では、当館所蔵歴史的公文書、写真などの歴史資料を用い、本庁舎の歴史を振り返っていきます。

1、橋樹郡役所と川崎町役場

明治4年(1871)7月14日の廃藩置県により、藩は県へと改められました。同年11月に神奈川県は相模国の三浦・鎌倉両郡、武蔵国の橋樹・久良岐・都筑3郡を県域とし、同9年(1876)4月には足柄県が廃止されたことにより、新たに相模国の足柄上下・大住・愛甲・^{ゆるぎ}淘綾・津久井の6郡が組み込まれました。

川崎市域は橋樹郡に所属し、橋樹郡役所は成仏寺(神奈川県川崎町824番地)に開設されました。



初代郡役所であった成仏寺

その後の明治21年(1881)に郡役所は新築移転され(神奈川県川崎町813番地)、横浜に近かったことから経済・政治の中心を担いました。

川崎町役場の前身は戸籍事務のほかは国や県・郡からの令達を住民へ伝え、徴税・徴兵・教育・厚生などをつとめる戸長役場でした。

市町村制施行に伴い明治20年(1887)頃に町役場へと改称、砂子・新宿町と移転、明治44年(1911)に堀之内345番地へと落ち着きました。

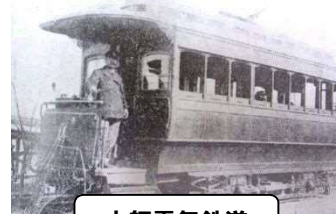
【表：明治期の川崎町役場の変遷】

明治2年(1869)	田中本陣長屋に戸長役場を置く
明治5年(1872) 以降	上下2箇所に戸長役場を置く。 上町・下町両戸長宅を役場とする
明治20年 (1887)	町役場へ改称し砂子に仮役場設置
—	新宿140番地に移転
—	同番地隣屋に移転
明治44年 (1911)	堀之内345番地に移る(大正13年に宮本町61番地に字名変更)

2、郡役所が川崎町へ

明治期の川崎は、鉄道の敷設や諸工場の設立により多くの人でにぎわいました。

例えば明治32年(1899)1月21日に、東日本で最初に大師電気鉄道〔川崎(のちの六郷橋)～大師間〕が開通しました。これは川崎大師参詣や行楽客の繁栄を促しました。



大師電気鉄道

大師人気は非常に高く、行事の時には東京の新橋駅から臨時列車が増発されるほどでした。

また発達した多摩川の水運と鉄道交通網と、貿易港横浜と大市場東京の中間に位置していたため、横浜精糖(のちの明治精糖)や東京電気(東芝)をはじめ多くの工場が続々と設立、多くの労働者がやってきました。

明治34年(1901)に神奈川県川崎町が横浜市に編入したことにより、大正2年(1913)4月、町役場近くの川崎町砂子に橋樹郡役所が移転しました。

一方大正期の町役場の様子は「大正10年 庶務書類(保険契約関係書)」(歴公1-2-A-7)によると、木造亜鉛葺2階建事務所、土蔵瓦葺平家建倉庫のほか、病室や宿直室などがありました。

火災保険申込書附録明細書

存続 所 所在地	保険ノ目的、備用方法及ビ品目	所轄官ノ数量	保険價額	保金額
1	役場 木造亜鉛葺2階建事務所 土蔵瓦葺平家建倉庫	1	4,300	4,300
2	病室	4	—	100
3	宿直室	4	5	50
4	木造瓦葺平家建 2又土蔵倉庫	1	100	100
5	木造瓦葺平家建 2又土蔵倉庫	4	50	50
6	木造瓦葺平家建 倉庫	2	200	200

「大正10年 庶務書類(保険契約関係書)」
(歴公1-2-A-7)

3、川崎市誕生と橋樹郡役所の廃止

工業発展により大きく飛躍していた川崎町でしたが、大正12年(1923)9月1日の関東大震災によ



バラック建ての町役場

り大工場は勿論、川崎大師も一部を除き崩壊し、道路や多摩川の堤防の至るところで陥没や亀裂の被害が出ました。

川崎町役場も崩壊したので、古財を

使いバラック建の庁舎を建てました。

そのような状態のほか、川崎町・大師町・御幸村が合併、大正13年(1924)7月1日に川崎市が誕生しました。初代市長には、明治・大正期の川崎工業の発展に尽力した石井泰助がなりました。



昭和2年の川崎市役所

そして大正14年(1925)10月12日に、役所が手狭になったため、旧川崎尋常高等小学校跡地の砂子1丁目58番地(現在地)に移転しました。



看板がはずされた郡役所

一方橋樹郡役所は大正15年(1926)に廃止となり、役所建物は元々併設されていた神奈川県川崎土木出張所のみとなりました。昭和期以降の横浜・川崎両市の市域

拡張により領域を縮小、昭和13年(1938)には「橋樹郡」という地名は消えてしまいました。